

72歳の断想

今年1月に私は72歳になった。数え年での古希から3年も経っており、昔ならば、名前に「翁」の敬称をつけて呼んでもらえたかもしれない。松尾芭蕉は、50歳にもならないうちから芭蕉翁であった。「翁」とは、身体は老いても適度に健康で、知識・経験・判断力に富み、バランスがとれている（言い換えれば、精神年齢が高い）ので、周囲の人たちから自然に重んじられるようになった老人のことだろう。しかし、今の世の中で、とくに東京のような大都会には、「ダレソレ翁」と呼ばれるのにふさわしい人は滅多にいないようだ。これは何故だろうか。

原因として簡単に思いつくのは、平均寿命が長くなったことであろう。アジア・太平洋戦争後の日本では、ご承知のように、平均寿命が急激に伸びて、2007年の時点で、男性79歳、女性86歳だそうである。女性は世界第1位である。また、72歳の男性の平均余命は約13年だということになっている。つまり、私は85歳ぐらいまで生きる可能性が高い。「人生50年」と言われた時代の平均寿命は、多分50歳をかなり下回っていたであろう。そうだとすると、私などは90歳ぐらいになるまでは、「翁」をつけて呼んでもらえなくても当たり前だということになる。

もうひとつの原因として考えられることは、現代においては、精神年齢が高くなるのではないかとということである。精神年齢が高くなければ、「翁」になれないのは

当然である。精神年齢という言い方は漠然としているが、広い意味での判断力を中心とする精神の力の大きさを意味しており、もっと具体的には、生きていくための智慧を身に付けていて、それを自在に生かせる能力であって、普通これは身体年齢に伴って高くなると思われている。だから、精神「年齢」という言葉ができたのであろう。

かつては、確かに精神年齢は身体年齢に比例することが多かったようである。何故今ではそうではないのだろうか。これに対して答えることは難しい。現代人、とくに都会に住む人々は余りにも忙しく、誰もが落ち着いて物事を考える時間を持っていないことと関係があるのではないかと思う。しかし、私にはそれを論証することはできない。あるいは、私たち自身の心に何らかのこだわりがあって、それが自由な精神の動きを阻害しているのかもしれない。全く逆に、かつて精神年齢が身体年齢とともに高くなっていたように見えたのが、実はそうではなかったのだという可能性もある。

私だけでなく、現代のシニア世代には、自分は歳をとっても、悟りの境地に達したかのような、精神的な余裕のある生き方はできないと思っている人が多いのではないだろうか。そのひとつの表れは「老人パワー」という言葉が生まれたことで、実際いろいろなことについて積極的に発言や行動をしているシニアが多い。

大江健三郎氏が2005年に出版した「さよ

うなら、私の本よ！」の主人公の一人は、世界革命の起爆者になることを企図するシニアである。大江氏は、この本を書いたころ、現代においてはシニア世代がもっと活動することが必要だとしばしば語っていた。大江氏は、海外作家の作品と自分の小説とを関連づけることをそれまでにもしていたが、この小説は、1948年度ノーベル文学賞受賞者 T. S. Eliot の詩 “GERONTION” の解釈に基づいている。GERONCHON(ゲロンチョン)とは、ギリシャ語の合成語で、「小さな老人」を意味するらしい。T. S. Eliot (1888-1965) はアメリカ生れでイギリスに帰化した人だが、この詩を書いたのは1919年だったそうである。第1次世界大戦前後のアメリカやイギリスでは既に、当時の日本とは状況が違って、老年というものが詩人の感性に訴えかけるものを持っていたのかもしれない。

私は、仮に90歳まで生きて、自分が悟りの境地に達することはあり得ないと感じている。そこで、大江氏の発言に乗るようだが、頭と体が続く限り、年寄りらしくないことをするゲロンチョンとして生きたいと思っている。私の大学のクラスメートの中には、そういう生き方をしているように見える人たちがいる。大いに頑張って、シニアの新しい生き方を創って欲しいものである。

折から、世界は激変期に入ったようだ。私たちの世代は、アジア・太平洋戦争での敗戦とそれに続く戦後の混乱期を少年少女としてくぐり抜け、その後の日本の経済的発展と社会的変貌、バブル崩壊と失われた10年を社会の中核を構成する者として目の当たりにするなど、大小さまざまな ups and downs を経験してきた。そして今、また新たな経済・社会の大きな変化の中で生きることになったのだが、この状況に私はゲロンチョンとして対処するしかなさそう。そうすることによって、遂には「見るべき程の事は見つ」という心境になるのかもしれないと思っている。(おわり)